

1. オリンピック社区—都市社会の「文明化」

2008年のオリンピックは北京で開催されることが、2001年7月のIOCモスクワ会議で決定されてから、北京では空前の建設ラッシュに沸き、都市の姿は日に日に変わりつつあるといわれる。その影響はさまざまな分野に及んでいる。

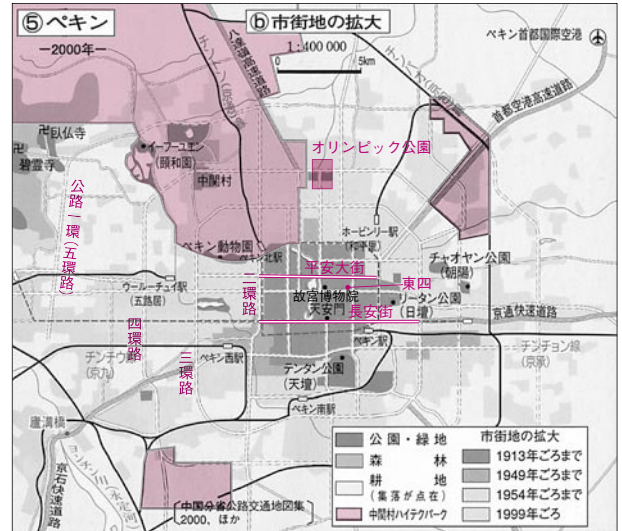
たとえば市の中心に近い東城区東四街道弁事処の一角に住む老人は、いつもなら表でも上半身は裸、パンツ一つで暑い夏を過ごしていた。しかし昨年はずっと服を着て過ごさなければならなかった。それはこの人が住む地区が「オリンピック社区」に指定されたからであった。（「あと4年北京五輪カウントダウン」『人民中国』2004.1）

社区とは、最近、急速に都市化が進む中国の都市において生まれた新しい観念で、旧来の都市の基本的社会組織である街道弁事処や居民委員会に比べより広範な機能を持ち、住民の自治による地域社会づくりをめざしている。当初、社区という用語は一般的なものではなかったが、1987年に国の民生部が「社区サービス」という考えを打ち出し、その後今日に至るまで公式に国家の社会政策として「社区建設」という用語が頻繁に用いられるようになってきた。

社区サービスとしては社会福祉の充実、住民の相互扶助や地縁性の重視などがあげられており、その活動の管理運営も住民自身によ



取り壊される民家と新しい住宅



帝国書院版『新詳高等地図 最新版』p.14

って自主的、民主的に行われるものとされている。

解放以来中国の社会ですすめられてきた都市住民の「単位人化」(単位=勤務先を中心とした空間に生活が完結しているようなあり方)がゆきづまり、先進国の近代市民社会に近い普通の「社会人化」(さまざまな職業や異なった勤務先をもつ人びとが任意に構成する生活空間に展開する社会)への方向転換の一環とみなされよう。

そのような中で東四街道弁事処の下に設定された「オリンピック社区」とは、オリンピックの開催に向けて北京の市民レベルでの取り組みの一環として提唱されたもので、オリンピックをきっかけに新しい市民社会をつくろうとする北京市政府や国の要望とも合致するものであった。

東四は故宮の東方、四合院様式の伝統的な住居が多く残存しており、古い北京の景観の風趣がただよう地区である。したがって家屋も旧式で暖房

も石炭を燃やすストーブを利用してきた。しかしオリンピック社区に指定されてから、これらの家屋でも暖房には電気を使うようになった。またトイレの改造や文化・スポーツ活動の施設の建設もすすめられている。そこではオリンピックで訪れる外国人のために、英語会話を学ぶ教室も開かれたりしているのである。オリンピックを迎え、住民は「文明礼貌」(礼儀正しくふるまうこと)を求められ、それまでの気ままなんびりとした生活を楽しんでいた老人たちは若干困惑もしている。しかしそのかわりに「文明」的生活条件が提供されるのである。

オリンピックはこのように北京のハードの面だけではなく、市民の意識改革をもたらそうとしている。SARS流行の責任を取って市長が辞任した後、市長代理をつとめる王岐山氏が述べているように、北京はオリンピックの開催を通じて都市の現代化をすすめるようとしているのである。(2003年9月25日の香港新聞界代表との会見)

2. 中関村—北京の都市化のシンボル

しかし北京の都市化はオリンピック開催決定以後に始まったものではなく、改革開放以後の長い変化の中に位置づける必要がある。次に近郊の一地区を通して簡単にそれを振り返ってみよう。(「中関村」『中国国家地理』2001.6北京專輯)

はじめて中国を訪れる人は、北京空港に到着して市内に向かうとき、急速に高層化がすすむ近郊の風景に驚かされる。また市内観光で必ず行くところの一つに頤和園がある。付近には円明園の遺跡や香山公園もあり、北京の西北郊には豊かな自然が残っているという印象をもつだろう。

しかしその一角にある北京大学・精華大学の南のあたりに踏み込むと、まったく異なった都市景観が現れる。ここが中国のシリコンバレーと呼ばれる中関村である。「村」などというから、いかに

も田舎のように聞こえてしまうが、ここは北京郊外の急速な都市化の中で生まれた最も都市らしい地区の一つなのである。



オリンピック村付近の新興住宅地

もともと北京の西北郊外は、北京が王城となったのち、王侯貴族の別荘や園林の所在地として知られていた。それに関連していまの中関村のあたりは、皇宮に奉仕した宦官＝中官の終焉の地として「中官墳」と呼ばれていたらしい。清末からは精華大学・燕京大学(後の北京大学)が設けられ、解放後も北京の西北郊外は文化教育地区として位置づけられた。その後も多くの高等教育機関や研究所が立地したが、それはあくまで閉鎖的な「単位」空間であり、中関村はその間をうめる古い近郊農村の風景を残した地域であった。

しかし改革開放のなかで、都市においても新しい流れが生まれる。この中関村は大学や研究所に近いところから、コンピュータ関連の小さな商店や企業も立地するようになる。そして1983年、「科海新技術開発公司」という一つの企業が生まれる。同じころ中国で最初のコンピュータのCPU製造会社「京海計算機機房技術開発公司」も成立する。これらを核として87年には100件以上の電子技術専門の企業がここに立地することになる。

その後88年には「北京新技術産業開発試験区」(99年に「中関村科技園区」と改名)が成立し、単なる点から広い面をもつ地区として北京の都市構造全体の中で卓越した機能をもつようになる。現在は中関村だけではなく、昌平園、豊台園なども含めた巨大な情報科学技術の開発区になっている。この開発区に働く人口は、中関村だけでも50万人になるといわれ、アメリカのシリコンバレーや台湾の新竹をはるかに上回る。

しかしこのような部分的な急成長は、全体の構造の成熟とバランスがとれていないとさまざまな都市問題が生まれる。新しい人口のための住宅不足はいうまでもなく、道路や鉄道など基礎的なインフラが十分整備されていないところへ、自家用車や輸送用のトラックの増加は、深刻な交通渋滞を引き起こしている。そのために四環路の建設がすすめられ、また都市軽軌道鉄道の建設も計画されている。オリンピックをきっかけにした都市全体の整備、とくに地下鉄や都市高速道路網の建設はこれらの問題の解決に貢献するであろう。ただその成果が明確になるのはこれからである。

3. 平安大街の改修—旧城改造とこれからの北京

近郊での急速な都市化と並んで、北京の変貌のもう一つの側面は、以前の内城・外城に囲まれた旧城地区における再開発である。現在進行している北京市の第十次五か年計画(2001~2005)においても全体としては都市化の中心を郊外に移し、衛星都市の建設が最も重要な課題とされているが、市区中心地区においても道路拡張を実施し、交通渋滞を解決することが基本施策にあげられている。ここではその中の一幹線路である平安大街の拡張改造を取り上げてみよう。(李建平「由北京平安大街建設引発的思想」『北京社会科学』1998.4)

平安大街は北海公園の北、内城中央のやや北を東西に走る幹線路で、北京の旧城改造の中でも重点項目の一つであった。もともとはせいぜい車がすれ違えるくらいの幅しかなかったのに、6車線をもつ広い道路に改造し、その過程で1.5万㎡、9900戸の家屋が移転を余儀なくされた。この街路に沿っては、多くの伝統的な民家や重要な歴史文化遺産があり、この改造をめぐる賛否両方の多くの議論が巻き起こった。

解放直後の旧城改造は主として城壁の一部を撤去して長安街を建設したり、天安門と正陽門の間

に天安門広場を設置し、周囲に人民大会堂や歴史博物館を置いたりするなど、極めて大きな建造物の建設に限られていた。その後環状地下鉄の建設にともなって城壁はほとんど撤去されたが、旧城の内部はほとんど解放前と変わらなかった。

しかし改革開放以後の80年代からは、老朽化して危険な家屋を取り壊し、そのあとを高層集合住宅に変えるという方式になってきた。90年代になると、住宅地区の改造だけではなく、主要道路の拡張、大型商業施設や公共施設の建設などをとめない、それまでとは異なった段階に入る。そして現在は、民間不動産業者による都心部の好条件を生かしたマンション建設が進行し、オリンピックによる建設ブームはそれに拍車をかけている。

しかし住民の生活も豊かになるとともに、文化遺産への関心も高まり、とくに歴史的に有名な建造物でなく、四合院や胡同(路地)からなる景観こそが老北京のアイデンティティにつながるものであり、それらを保存すべきであるという意見も、住民の間から出されるようになった。議論の過程では、長安街が中国の代表的街路として中国の政治中心、文化中心としての機能を果たすなら、平安大街は北京の文化大街として、北京の歴史文化の風貌を代表するものにしようという意見もあった。

しかし平安大街には、同時に極めて現代的な景観を呈する部分もあり、一つの街路は単純な風貌だけをもつわけではない。それは北京が全体としても、過去から現代へ、そしてこれからの未来まで、具体的な景観で示しているのと同じである。オリンピックまであと4年、この間にもさまざまな変貌を遂げる大都市に注目していきたい。



拡張された歩道と改造された旧住宅
(平安大街東部)